

駱駝隊

Kuge, Tsukasa / 久下, 司

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大學史學會々報 / 法政大學史學會々報

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

1953-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010446>

駱
駝
隊

久
下
司

支那西北の奥地に於ては今日とても尙交通機關の發達に恵まれて居ないので、人口極めて稀薄な広漠たるゴビ沙漠の高原北帯を

越えるには縦断数十日、横断は数ヶ月を要する。故に其の間には思はぬ天候の変動に逢い、時に狼の襲撃を受け、或は匪賊に狙は

れることもあるので、此のような地域を往復して交易する奥地の商人は何れも駱駝隊によつて物資の運搬を行つてゐる。私のもと居た短邊は此の駱駝隊の発着地になつてゐたから、常に是等隊商の人達と接し、旅中の話も聞いていたので、これに就いて記して見ようと思ふ。

【駱駝】駱駝は背に一瘤あるものと二瘤あるものとあつて、前者を單峯駝、後者を雙峯駝と云ふ。單峯駝はアラビヤ・シリヤ・小アジア・イラン・西北インド・露領ウズベク・アフガニスタン等の熱地に産し、今日ではアフリカ東海岸の諸地方・サハラ沙漠・エチオピア・カナリヤ諸島・イタリヤ・南スペイン及濠洲等でも之を移養して使役してゐる。雙峯駝はゴビ沙漠を中心として其の周辺の滿洲・蒙古・西藏・南シベリヤ・東西トルキスタン・アフガニスタン等の寒地に飼育されてゐる。尙此の外ホラサンには單峯駝の交配種も居る。單峯駝雙峯駝は其の居住地の関係で幾分その性質に違いはあるが、共に温順にしてよく人意を解し重き荷を積載して長途の旅をなし、其の間沙漠地に於て他の動物では食せぬような棘のある雜草や灌木の芽の如き粗食に耐え、且つ数日間も水も飲まずに歩行出来るので誠に沙漠の旅行に適した動物である。故に沙漠の船とも云われている。其の顔面は平かにして可愛らしい細眼があり、鼻は羊に似て頂尖り、耕は小牛に似てゐる。此の眼には長い睫があり鼻孔は閉開自在なる為、強烈な朔風に逢つた時は之を閉ぢて砂の眼や口に入るを防ぐことが出来る。又口部は上唇が二つに割れてゐるので塵埃の浮んだ水でも之を避けて吸飲出来る。背には皮下組織の中にある脂肪性の大きな瘤が突出してゐる。之は駱駝の榮養と非常に関係があつて、榮養のよい若

い元氣な駱駝は之が高く隆起し、榮養の悪いものや長途の旅行に疲勞したもの、或は老衰したものは萎えて垂れてゐる。次に胸部と臀部とは甚だ狭く、尾は短くして其の端は房状をなしてゐる。

四肢は長くして蹄肉は特に肥大し沙中を歩むに適してゐる。胃は第三までであるが第一胃の周りには多くの水囊があつて、之に清水を貯え旅中の渴に備えられてゐる。其の歩行は極めて特色があり同側の二肢を同時に前進させるので、体が非常に動搖するから乗心地はよくない。殊に大風が吹來つて流沙の大波が荒れ狂うと、窺も船に乗つたと同じように眩暈すると云ふ。

單峯駝は体軀大にして四肢と頸とは頗る長い。暑熱地に居るのて体毛は短く殆ど淡砂色であるが、時には、白・灰・褐・黒等の変色も居る。積載力は五六百斤であるが雙方駝に比し持久性は劣る。雙峯駝は前者に比して稍小さく体高は約二米で、四肢と頸も稍短い。寒地に居るので体毛は長く殊に頭・頸・肩・瘤・前肢等には長い絨毛が密生してゐる。毛色は前者より濃厚にして殆ど褐色である。

【駱駝隊の組織】西北の奥地では人煙稀なそれも定住の人無く、沙漠の水草ある附近にだけ家畜を逐つて遊牧の生活を営む蒙古人地帯を通つて旅行しなければならぬので、途中種々の危険に晒されることが多い。大陸の天候は三寒四温であるから、如何に好天候の時に出発しても数日経つと空は崩れて天地晦冥となり、烈風一度胡沙を飛ばして襲來すれば、忽ち氣温低下して霜雪を降らし曠野は瞬時にして白雪の蔽う処となる。故に余程身体を健康にしておかないと其の旅行には耐えられない。又この地方では猛獸は殆ど居ないが、狼は非常に多い。狼は人手の少いを見ると群

をなして襲つて来るので、之に対しては極めて注意を要する。尙この辺では屢々匪賊が出没するから之も警戒しなければならない。そこで西北奥地の商売は之等の危険を共同して防衛する為、物資は隊商によつて運輸するのである。此の隊商の組織には色々ある。商賈自らの駱駝を以て之を組織するもの、駝戸に依頼して隊を編制せしめるもの、小商賈合同して一隊を組織するもの等がある。

駝夫は一人五頭から八頭位の駱駝をひく。駱駝隊は普通この駱駝十四・五頭から二十頭を以て一組とし之を一連と云う。この二連を以て一把とし、五把を以て一頂房とする。一頂房の駱駝は百四五十頭乃至二百頭から成つてゐる。之が駱駝隊の一隊である。

連・把・頂房には各長を置く。一頂房の長は把兒頭と云つて之が所謂駝夫頭で、其の一隊を率いて先驅となり、行先の地形・路況・水草・匪状隊商の行動に必要な一切を探索し、之に向つて善処し己が隊を誘導する。旅行中は絶対の權威を有し駝夫はすべて其の命に服従しなければならぬ。故にこの把兒頭の責任は非常に重く、此の役になるには長年駱駝と共に生活して駱駝に関する一切を知悉し、其の旅路は屢々往復してよく地理に通じ、勇敢にして然もよく業を率いる才と人望とを備えた長老でなければならぬ。

先づ隊が編制されると駝夫は把兒頭から旅中に於ける職務の分担が命ぜられる。彼等は之によつて貨物の管理・駱駝の飼養・燃料調達・水汲・炊事・雑務等各古老指揮の下に規率正しく機敏に団体行動をするのである。旅行の用具としては・天幕・食料大鍋・五徳・水槽・調理具・食器等を携行する。之等用具と貨物との

駱駝積荷の割合は大体二対八である。然乍ら必ずしも此のような組織を以て編成されるとは限らない。時には三十頭乃至五十頭位で編成される事もあるし、又一千頭を越える事もある。

【駱駝隊の行動】雙峯駝は寒地の産であるから、炎暑の頃になると日中の旅行は駱駝が疲労するので主として夜間行動する。駱駝は夜休めば膝を折つて眠り、食物はとらない。故に晝間は水草のよき地へ伴れて行つて放牧し十分に食をとらせる。又長途の旅では駱駝の疲労せぬよう榮養をよくする為一日一頭に付豆類一升位を与えなければならぬし、一週に一度は胡麻油か種子油五合位与える必要がある。

駝夫は緩遠に於ても奥地に於ても皆回教徒である。彼等は少時より駱駝と共に起居して育ち、十四五才になれば父兄に従つて隊商と共に遠く故郷を離れて長途の旅に出で、途中の艱苦を共にし将来駝夫となるべく訓練される。斯くて実地に駱駝の世話・疾病の手当・地形の観察・行路の採択・露營の方法・飲料水の選択・荷物の梱包積卸・天候の変動に対する処置等を教えられ長途の困苦に耐えられるようになって始めて一人前の駝夫となるのである。故に駝夫となるのも容易な事でない。

駱駝も亦生れて歩行が出来るようになる。母駱駝に従つて乳を飲み乍ら長途の旅に伴れられる。こうして二才までは他の駱駝と行動を共にして歩行することを仕込まれる。ついで鼻に孔が穿たれ鼻木を通じて綱を結ばれる。而して四・五才になると体軀も完成して骨格も固まるので始めて一頭の駱駝として雄は去勢され、老齢になるまで使役されるのである。

駝夫は大体己が家の駱駝を率いて駝戸の下に雇はれるのである。

が、一人前の駝夫は六・七頭を引くので、貧困な者はそれだけの駝を有つていない。此のような者は駝戸の家に一旅行幾何として雇はれ駝戸の駝を率いて旅に出る。駝戸は多数の駝を所有していて奥地の商売から貨客の運輸を依頼されて、駝隊を編成するのである。

綏遠から西北奥地に到る距離はゴビ沙漠を越えて涼州まで四十日、甘州まで四十五日、肅州まで六十日、オルドスを越えると寧夏まで二十日、それより西寧まで十八日、又新疆省の哈密・迪化までは約三ヶ月行程である。併し之も天候順調にして途中事故なく旅行するものとしての所要日数であるから、若し一度事故が起れば此の予定は全く狂つてくる。時には通れると思つた路が解氷期に屢々起る大洪水の爲、或は匪徒出沒の爲通行不能になつて元來た路を幾日も引返して別の路を廻る事も珍らしくない。故に新疆地方への旅になると二年越にさえなることがある。

駝隊が出発するのは大体晩秋から初冬の候である。この頃になると野に放たれた駝駝は肥満して元氣旺盛になり、新毛は生え揃つて長途の旅に耐えられるようになる。駝戸の下に於て駝隊が編成され荷物（一個百五十斤程の荷物二個を鞍の両側へつける）の積載が終ると、次の如く整列する。

道案内（時に欠く）。把兒頭。蒙古犬（狼も恐れぬ摩猛犬にして數匹が常に隊の先驅になり脇になつて隊の警戒に當る。）鈴付駝（一斗樽位の大鈴にして惡獸惡魔除け）。この後に駝夫の率いる駝駝が連把頂房の準序通り一列縦隊に並ぶ。

大きな隊になると此の外に全隊の統率者・會計・庶務（以上騎駝）・連絡員（騎馬）等が設けられる、こうして三四百頭の駝

が並ぶと我国の一里位の長さになる。出發は大体日没頃である。駝戸・旅宿・知己の人達は一路平安を祈つて城外まで見送る。

送る者も送られる者も眼に涙が光る。驢駝は丁当と鈴を鳴らして發足する。斯くて一行は野を越え谷を渡り山の彼方へと消えて行く。このようにして西域の旅路につくのである。彼等は夜間大体五―七時間位歩くのである。隊商路は広漠たる大高原の沙丘を縫つて行くので、吾等には何処が路かわからないが、彼等は夜間でも燈火は用いない。把兒頭は馴れた路であるから星・風・隴線で方向を見定めて進む。併し濕地・谷間・岐路等では懐中電燈を用いる。駝駝は脚が長いので馬より早い、駝夫も亦体格がよいので駝夫小唄等歌い乍ら悠々と歩を運んで行く。駝駝の歩行力は一七時間六・七十支里であるが、重き荷を積載して毎日続く歩きにくい長途の旅を控えているので、大体一日五・六時間四・五十支里で宿營するのである。

次に隊商路に於ける情報連絡員が途々遊牧部落へ馳せて調査する外、途上行交う隊商から得て把兒頭に報告する。仮令情報があつても使を派して附近の警護隊に保護を依頼すれば、隊長の顔で物品か金錢を納めることによつて大抵は無事に通らせてくれる。

又沙漠の草地では蒙古の王公が其の所領の通行者に対して路に徵稅所を設け、隊商から通行稅と秣代とを徵取している。

【交易物資】綏遠奥地の駝隊路に於て隊商に使役されている駝駝は三万頭乃至五万頭と云はれ、之等は奥地から羊・山羊・牛・馬其の他の皮毛・葉材及び水烟・阿片等を將來し、綏遠からは布帛・磚茶・石油・ガラス・雜貨等を持歸つてゐる。尙綏遠から奥

地へ行く駝商は之等の品を持つて行つて、帰途は皮毛・薬材等を購入して来るのである。

【駱駝路】支那西北の高原は一望千里の曠野であるから何処でも通れそうであるが、そう簡単に駱駝路とはならない。駱駝が如何に沙漠の動物でも、路以外の所に入つたら脚が沙中に没したり、或は棘鋭き灌木や雑草の根株が起伏し、又は濕地が横はつていて全く歩行は出来ない。故に駱駝路は広い沙漠の中でも極めて限られた沙少き比較的平坦な岩礫上の一線を選んで設けられたもので、古来幾百千年の間多くの隊商によつて陥み固められて来た処である。此の駱駝路には通行者の為に処々に宿营地が定められ、井・流水・泉水等がある。隊商は此処で一夜の夢を明かす。其処には前隊商の駱駝の糞が沢山落ちているので、之を燃して燈火とし兼ねて暖をとりつつ食事する。翌日は又西域の山を目指して沙丘の路をさく／＼と進んで行くのである。水は沙漠の旅行者にと

つて命の綱であるから、駝夫は其の所在地は悉く知つてゐる。

【絹の路】綏遠以西の駱駝路は何れも皆西域に向つて開かれ、往時より中国と西域諸国とを通じ、タリム盆地の諸市場に於て更に西方から来た胡商の単峯駝に中継されて、中国の優秀なる文化は更に西方へと広まつたのである。それと共に西域僻遠の諸文化も亦この路を通じて中国に伝来し東亜文化と交流したのであつた。其の諸路の中でも綏遠と哈密及西安と哈密とを繋ぐ公路は西域交通の幹線にして、嘗ては絹の路として文化史上重要な駱駝交通路であつたのである。

駱駝隊は此の西北奥地の沙漠路に於ては、今日とても尙唯一の交通機関であるばかりでなく、将来も亦之に依らねば西域の旅は出来なむであらう。況や奥地には東西文化交流の鍵を秘める史跡が沙中に眠つてゐるが、之も駱駝隊によらねば発掘も調査も不可能である。